広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	井福剛著『 古代ローマ帝国期における北アフリカ―カルタゴ周辺地域における文化と記憶』
Author(s)	ゲイル, エドワード
Citation	史学研究 , 302 : 80 - 83
Issue Date	2019-04-19
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055653
Right	
Relation	

井福剛著『古代ローマ帝国期における北アフリカ——カルタゴ周辺地域における文化と記憶』

ゲイル・エドワード

本書は、著者が二〇一七年度に同志社大学大学院文学研究科に提出した博士論文が基となっており、主に二つの題材が扱われている。一～三章においては現チュニジアに存在した古代都市トゥッガにおける、ローマ人入植者の共同体と元々トゥッガに居住していた現地住民の共同体の間でどのような接触と関係性が存在していたのかが考察対象となる。四章では一転してローマ人から見たカルタゴのイメージとその利用が述べられ、五章ではローマ期の都市カルタゴにおけるローマ性とカルタゴ性という二つのイメージがどのように併存し、属州に影響を与えたかが分析される。総合的には本書はローマ帝国期における北アフリカにおける、被支配者の自己認識と文化の形成が主テーマだと言えるだろう。

序論においては、ローマ帝国支配下の北アフリカの沿革が述べられた後に、研究史が概観される。二〇世紀初頭のF・ハバーフィールドの研究以降、ローマ帝国の属州支配は「ローマ化」概念が軸となって研究が展開され、そこではいかにしてローマ文化が属州に浸透し現地の文化を塗り替えていったかが着目された。こうした上から下への一方的な文化の浸透という見方ではローマ期以前にあった現地文化は「塗り替えられるべきもの」とされ、現地住民も受動的にローマ化されていくだけの存在としてみなされた。こうした解釈は、六〇年代頃からベナブらから強く批判され、ローマ化に抵抗し自らの文化を守ろうとする現地住民の姿が強調された。しかしこれらの研究は「ローマ」と「現地」をそれぞれ均一的なものとして捉え、両者が二項対立として存在していたという単純な解釈であり、現実の複雑さに対応できていないという批判がなされた。

その後はポストコロニアル理論を取り組んだマッティンリ

らによりクレオール化や異種混淆といった概念でローマ期の北アフリカの研究が進んだが、この後は逆にクレオール化や異種混淆があったか否かを証明することのみが研究の目的となってしまい、結局は「ローマ」と「現地」の二項対立に陥り研究が停滞したと著者は主張する。著者によればローマ支配以前から北アフリカにはリビア人、ヌミディア人、カルタゴ人など複数の文化が混在していたのであり、異種混淆が生じるのは当然である。着目すべきは異種混淆の過程を具体的なコンテクストに落とし込むことで、現地の住民にとってそれがどのような意味を持っていたかであり、これを検証するために著者は社会が文化を規定するのではなく、文化が社会を規定するという文化論的転回と「新しい文化史」の理論を援用するとしている。

「第Ⅰ章　トゥッガにおけるマルキウス氏族とカピトリウム神殿建設」ではまず最初にトゥッガの略史と、同地に存在していた現地住民の共同体であるキウィタスと入植したローマ市民権保有者の共同体であるパグスのあらましが解説され、その後に本題であるマルキウス氏族と同地に一六六年から一六八年頃に建設されたカピトリウム神殿の関係性が分析される。マルキウス氏族は元々トゥッガに在住していた有力な現地住民の一族で、ローマ市民権をある段階で獲得した後は両共同体の仲介者とも言うべきパトロヌスを複数輩出した現地エリートである。この氏族によるカピトリウム神殿建設に関する碑文を基に、このローマ的な神殿がトゥッガの両共同体にとってどのような意味合いを持ったかが考察され、神殿が新たな都市景観を生み二つの共同体を一つにする役割を果たしたとする。

「第Ⅱ章　トゥッガにおけるガビニウス氏族と神殿建設」においては、マルキウス氏族と同じくローマ市民権を獲得した有力な現地住民の家系であり、トゥッガの両共同体のパトロヌスだったガビニウス氏族が着目される。ガビニウス氏族は二世紀前半にトゥッガにおいてコンコルディアやネプトゥヌスなど、ローマの神格を祀った複数の神殿の建設を主導しており、第Ⅰ章のマルキウス氏族と合わせて現地人の出自であるこういったエリートがどのように両共同体の間を取り持とうとしたかが宗教面から考察されている。ここでは、これらの神格のローマ的起源は彼らにとってあまり問題ではなかったとされ、それらがトゥッガ全体や各共同体の間で持っていた意味合いが重要視されている。

「第Ⅲ章　トゥッガにおけるサトゥルヌス神殿建設」においては、二世紀末期にトゥッガで建設されたサトゥルヌス神殿を通してトゥッガの人々の宗教実践がどのようなものだったかが考察される。サトゥルヌスは北アフリカにおいてはカルタゴ人の神格であるバアルと同一視されており、帝政期においてもトゥッガを含め広く信仰されていた。トゥッガにおけるサトゥルヌス神殿は古くからあったサトゥルヌスの聖地にキウィタスとパグスが共同で奉献したものである。現地住民から長く信仰されてきたバアル＝サトゥルヌスの神殿が、

ローマ的建築様式でその聖地に建てられたことに著者は両共同体が、宗教実践を通して接近していたことを見て取っている。

「第Ⅳ章　ポエニ戦争後から帝政初期におけるカルタゴの記憶」で叙述視点はトゥッガを離れ、ローマ側が着目されている。ここで語られるのは、ローマ人にとってのカルタゴ人のイメージである。ポエニ戦争期のラテン文学などにおいては、カルタゴ人は狡猾で不誠実だというギリシア人のステレオタイプをそのまま受け継いだ形で描写されていたが、プラウトゥスの喜劇作品に見られるようにある程度の人間性も認められていた。しかし、カルタゴという国家がローマに破壊され一〇〇年近く経った共和制末期において、カルタゴ人は人肉食を含めその残虐性が著しく強調された形で描写されるようになった。このことに関して著者は、カルタゴ滅亡から長い期間が経ち存在が消失したカルタゴ人、特にローマを苦しめた将軍ハンニバルが負のイメージを背負わせることにうってつけの存在だったことと、共和制末期の激しい政争と内乱の中で、政敵に対して過去の外敵カルタゴのイメージを当てはめて悪魔化することが常態化していたと指摘する。更に事態はこれに留まらず、過去の敵であったカルタゴが過度にネガティブに描写されることで、それを打ち破ったポエニ戦争期のローマ人の偉大さも強調されることになり、共和制末期のローマ内部に敵が存在する「現在」のローマが偉大な過去の時代と比べて「混乱の時代」として位置づけられた、とする。

「第Ⅴ章「理想」のローマ都市カルタゴとカエレスティス神殿」では前章の内容を踏まえて共和制末期に悪魔化されたカルタゴのイメージと、現実に存在したローマ期の都市カルタゴとの間でどのような相互作用が存在したかが、カエレスティス信仰を軸に論じられる。周知の通り、カルタゴは前一四六年に一度ローマにより完全に破壊されており、ローマ期の都市カルタゴは前二九年頃にアウグストゥスの命で一から再建されたものである。その景観は典型的なローマ都市のものであり格子状の街路や公共建築物が密集するフォルムなどで彩られていた。このため、古代の文献においても近現代の研究においても、ローマ期カルタゴはそのローマ性が強調されていた。しかしその一方で帝政期においてもなお、再誕した筈のローマ都市カルタゴとその住人に対してかつてのカルタゴと同じようなネガティブなイメージが投影されることがしばしばあった。著者の言葉を借りると、ローマ期カルタゴは帝国のコンコルディアを体現すると同時に、旧カルタゴの記憶の継続というディスコルディアという二面性を備えていたのである。本章で着目される、帝政期カルタゴにおけるカエレスティス信仰は元々がカルタゴ人の女神タニトがローマ期にカエレスティスに名を変えたものに端を発している。そして都市カルタゴだけでなくトゥッガにおいてもカエレスティスの神殿が存在した。ここではカルタゴとトゥッガにおけるカエレスティス信仰の形態とその差異が論じられ、著者

はトゥッガのカエレスティス神殿の碑文などから、トゥッガの人々にとってカエレスティス信仰は自身らがローマ帝国に属するものとして位置づける機能があったことと、それと同時に彼らにとって「ローマ」のイメージは海の向こうの実際の都市ローマではなく近隣のローマ的都市カルタゴであったとする。このため、彼らにとって「ローマ的」文化とは、ポエニ期カルタゴの記憶も含んだものだったのである。

著者はこれらの議論をまとめ、最後に「ローマ的なるもの」を定義づけようとする。それは帝国全体を結びつける共通項でありながらも、地域ごとの差異をはらんでいた。カルタゴにおいては、ローマのかつての仇敵であるというカルタゴの歴史が他属州においてはない独自性をもたらしていた。ローマ都市として再建されたカルタゴにおいて、過去の敵としてのカルタゴのイメージが文化や信仰面で継続すると同時に、ローマ都市としての側面がアフリカにおける「ローマ的なるもの」のイメージの根幹となっていたのである。このように、各属州においてそれぞれの代表的な都市が「ローマ的なるもの」のイメージを作り出していたとすれば、その差異を研究することでその地域の特殊性を明らかにできるだろうとして著者は筆を置いている。

本書は、トゥッガという単一地域における事例調査に留まらずにそこからローマ人のカルタゴ認識、アフリカ人のローマ認識、そして確かに存在しながらも把握が難しい「ローマ的なるもの」がなんだったのかを明らかにしようとする意欲的な研究である。「ローマ化」概念をめぐる議論が今もなお活発である現在、本書は帝政期ローマ研究に重要な問題提起を為していると言えるだろう。

評者の専門は帝政期ローマの軍事史であり、兵士個人の心性やアイデンティティも研究対象に含まれている。そういった観点から見ても、本書のテーマである文化の異種混淆のプロセスと実態、そして支配者と被支配者間のイメージの形成は重要な意味を持つ。本書が扱う地域であるアフリカ属州は、元老院属州の中で唯一軍団が配備されていた属州であり、また同属州出身の兵士は軍団・補助軍・艦隊において多数が確認されている。カルタゴがローマの仇敵であり、そのために徹底的に破壊されたという歴史的経緯がカルタゴにおける「ローマ」イメージに独自性をもたらしたという本書の結論に従うならば、アフリカ属州出身のローマ兵のアイデンティティや自己イメージ、あるいは「本土」イタリア出身の兵士や将校が軍務中に彼らに対してどのようなイメージを持ち、接触をしていたかという疑問が生じてくるが、こうした疑問を本書で用いられる方法論を用いて分析することも可能であろう。帝政期ローマ研究の他分野においても、こういった新たな問いを生み出し新たな研究の可能性を示すという点で本書は優れた問題提起を行っていると言えるだろう。

（関西学院大学出版会、二〇一八年三月、一七〇頁、本体価格三、六〇〇円）

（広島大学大学院文学研究科博士課程前期）